

これまでの調査結果



奄美大島とやんばるで2015年から、また徳之島では2018年から、調査を実施しています。エリアや対象の木（以下、標本木）を検討しながら、最も優占するスタジイについては、これまでに奄美大島の4エリアに計24本、やんばるの4エリアに計22本、徳之島の6エリアに計30本の標本木を設定しました。

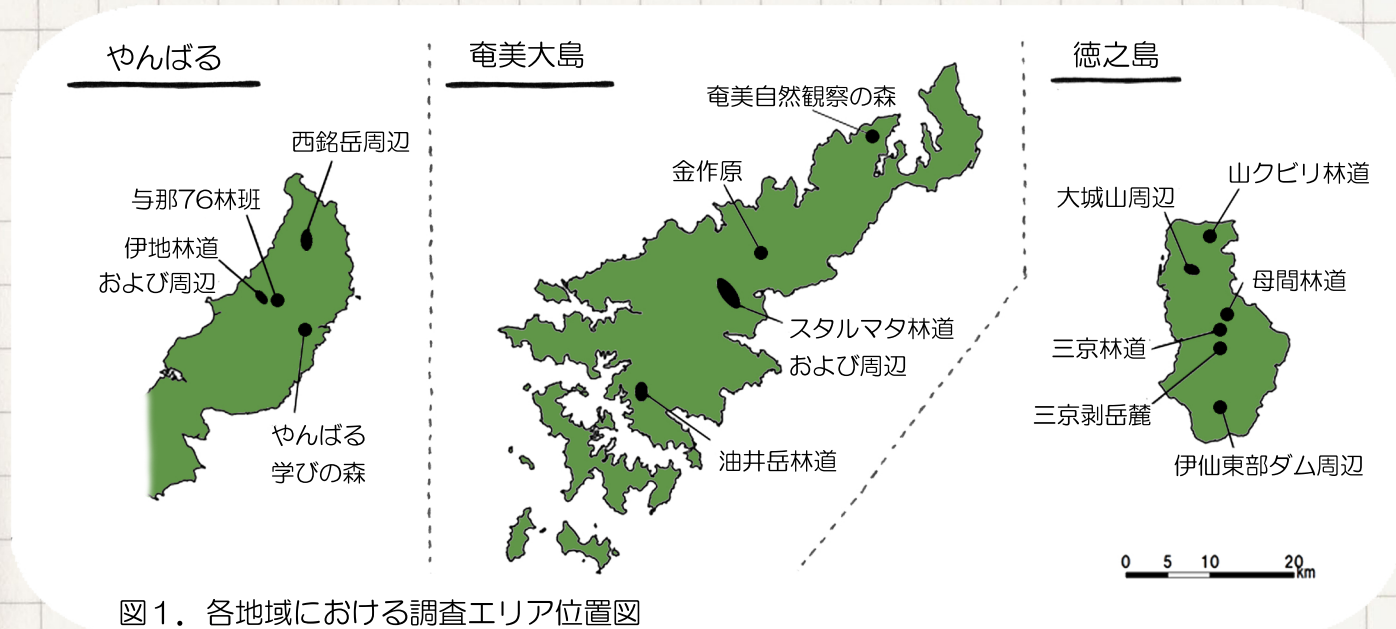


図1. 各地域における調査エリア位置図

ドングリが大きくなる秋に、双眼鏡を使用して枝先の着葉部（^{しゅかん}樹冠）を30秒間観察し、ドングリを数えます。2名以上の調査者が標本木ごとにこれを4回繰り返し、カウント数の平均を、その年のドングリ生産量の指標とします。

7年間の調査で、奄美大島とやんばるでは、ともに2018年のカウント数が最大になるなど、ドングリ生産量の増減がおおむね同調していることが明らかになりました。また徳之島も、調査を始めて4年が経過しましたが、増減は奄美大島ややんばるとほぼ一致していました。これらのことから、中琉球のこの地域でスタジイのドングリの豊凶は同調する傾向があると推察されました。

また一方で、各島の中でもエリアによって生産量に違いがみられたり、凶作の年にもよく結実する特定の標本木があったりするなど、広く継続的な観察だからこそわかる発見もありました。

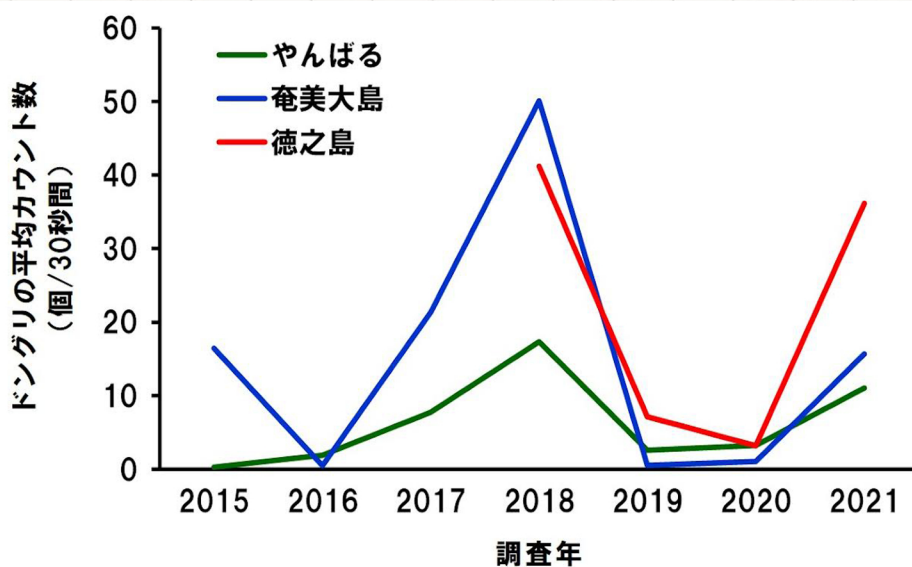


図2. スタジイのドングリ生産量の調査結果

